

アルバータ大学教育学部イングリッシュ・ランゲージ・スクールへの短期留学プログラムの視察報告

An Investigation Report of ESL Program in English Language School, Faculty of Education, University of Alberta

林 日佳理¹

HAYASHI Hikari¹

[キーワード Keyword] 短期留学, 学術交流協定, アルバータ大学, ESL (English as a Second Language)

[所 属 Institution] ¹岐阜大学教育学部 (Faculty of Education, Gifu University)

[要 旨 Abstract] 本稿は、アルバータ大学イングリッシュ・ランゲージ・スクールへの短期留学についての視察報告を行う。当スクールのオリジナル教材によって組み立てられた質の高い授業と、参加者の自発的な行動を促す付属アクティビティの運営によって、参加者の全体的な満足度はかなり高い水準にあることが示される。さらに、短期留学実施後のアンケート調査に対する回答の分析を通じて、本プログラムの特色を示し、今後の課題について検討する。また、今回の短期留学がCOVID-19影響下での試みであったことにもふれ、最適なサポート方法についても考察する。

1. はじめに

岐阜大学は2022年現在、大学間学術交流協定を19か国50大学、部局間学術交流協定を26か国1地域62大学と締結している（岐阜大学グローバル推進機構HPより）。海外留学を目指す学生に対して、本学はさまざまな学習機会を提供してきたが、2020年以降COVID-19の世界的流行のために、実際に現地に赴き勉強する機会を提供することが困難になった。その中で、全学部の学生を対象とする短期英語研修プログラム（カナダのアルバータ大学でのESLプログラムとESTプログラム、オーストラリアのグリフィス大学でのESLプログラム／ESLはEnglish as a Second Languageの略、ESTはEnglish for Science and Technologyの略）は、2021年春から2022年春の開催まで、通常のプログラムをオンラインに移して行われた。2022年夏からは、各国の認識の変化や大学の方針により、久しぶりに現地に派遣できることになった。これらのプログラムは、オンラインで実施された際にも高い評価を得ていたが、やはり実際に海外に行きたいという学生たちが多く、今年度4月に行われた留学説明会ではその期待を反映してかなりの数の学生が参加した。その後、航空運賃高騰などのために応募者数の変動はあったが、アルバータ大学ESLプログラムにもグリフィス大学ESLプログラムにも意欲の高い学生たちが集まった。残念ながら、アルバータ大学ESTプログラムは応募者が少なく今年度は実施されないことになったが、アルバータ大学ESLプログラムには6名、グリフィス大学ESLプログラムには30名の参加者を得た。本稿では、執筆者が引率・視察したアルバータ大学ESLプログラムについて、その実践内容を報告し、参加者の声を分析することによって今後の留学プログラムにおける改善点を探る。

2. 実施内容及び結果

アルバータ大学ESLプログラムは、2016年度にアルバータ大学との大学間学術交流協定が結ばれたのち、2017年度に開始された。2018年には新たに理系学生向けのESTプログラムも開始されたが、上述の理由で今年度は実施されなかった。アルバータ大学ESLプログラムは、アルバータ大学が岐阜大学のためにカスタマイズした3週間の英語研修である。実際の業務を行うアルバータ大学イングリッシュ・ランゲージ・スクールは、これまでは大学附属部局であったところから、今年度から教育学部に組み込まれている。

2022年度は、8月7日から8月27日までの予定で、工学部と応用生物科学部の学部生6名（1年生2名、2年生2名、3年生1名、4年生1名）が参加した。参加者は渡航前の6～7月にかけて、オンラインで事前プレイズメントテストを受け、それぞれの英語力に合わせて3つのクラスに配分された。

2. 1. 現地での学習

図1	活動内容
08:30 – 12:30	授業（間に10～20分の休憩あり）
12:30 – 13:00	昼食
13:00 – 14:30	アクティビティ（センターのスタッフが企画）
14:30 –	自由時間

授業が行われるのは、アルバータ大学のメインキャンパスから電車で3駅離れた、エドモントンの中心街にあるアルバータ大学付属部局（Extension Faculty）の建物である（ただし、先述したようにイングリッシュ・ランゲージ・センターはアルバータ大学教育学部の組織となっている）。例年であれば参加者はそれぞれホームステイを行うが、今年度はホームステイ先不足のためアルバータ大学内の寮（Saint Joseph’s College）で共同生活を送ることになったことから、毎朝参加者全員で電車通学した。クラスは全部で3つあり、それぞれの講師は第二言語としての英語習得（English as a Second Language）の教育活動に長年従事してきたベテランである。それぞれのクラスは16～20人前後で、そのうちの9割が日本人であった（上級レベルのクラスにのみ、4名のメキシコ国籍の受講者がいた）。本学以外の大学や高校から、同じような短期派遣プログラムで来ている受講者がほとんどであった。

授業はセンター独自の教材に基づいて構成され、1日に1モジュール取り組むようになっている。この独自教材はセンターの講師によって作成され、それぞれのクラスのレベルに合わせて取り組む内容のアレンジができるようになっており、教える側の利便性と教えられる側のニーズにうまくマッチしたものとなっている。各モジュールのテーマは、異文化理解からカナダの歴史や文化、環境保全にいたるまで多岐にわたるものである。本プログラムの現地呼称が“Communication Skills for Global Citizenship”となっていることから、国の違いを超えたグローバル市民としての意識を高めるように計画されている。特に、カナダにおける先住民に関する歴史として寄宿学校（residential school）のトピックがあったり、地球環境についてSDGsの項目を扱うトピックがあったりして、公平な目線で最先端の世界状況を認識させる内容になっていることが、執筆者としては感慨深かった。

教材のタイプとしては、音声リスニング、ビデオ視聴リスニング、文章読解、スピーキングやディスカッション課題、ライティング課題などが多数おさめられ、それぞれの技能に偏りすぎることなく、かつ参加者の不得意分野をうまく伸ばすように、講師の裁量で選択されていた。それぞれの活動は20～30分ほどで完結し、講師は受講者を飽きさせることなく多様な取り組みをさせていた。教室内では3～5人ずつのグループに分けられ、受講者は可動式の机を突き合わせて課題に取り組むように指示される。その中で、グループ内でのディスカッションや協力を促し、すべての受講生がそれぞれの能力に合ったやり方で課題に取り組むことができるようになっていた。このグループはおよそ週に1回改編され、結果的にクラスのほとんどのメンバーと交流することができるように考慮されていた。また、クラスによって週に1～2回、グループあるいは個人でのプレゼンテーションが求められることがあった。それらの活動では、受講生たちがポスターを作成したりスライドを使用したりしながら、いかにわかりやすく、自信をもって英語を話せるようになるかを重視していた。

午後のアクティビティについては、Student Engagement Center（SEC）のスタッフ主導で、アルバータ大学内ツアーやエドモントンの街の名所訪問など、多彩なイベントが計画されていた。また毎週木曜日は“Conversation Club”と称して、本プログラム受講生以外にもさまざまなプログラムに参加するアルバータ大学の留学生たちを一堂に集め、異なる国籍やバックグラウンドの人と英語でコミュニケーションをはかるといった機会が設けられた。また、3週間のプログラムのうちのひとつの週末には、カナディアン・ロッキー・ツアーが設定されており、本学からの参加者6名全員が参加した。

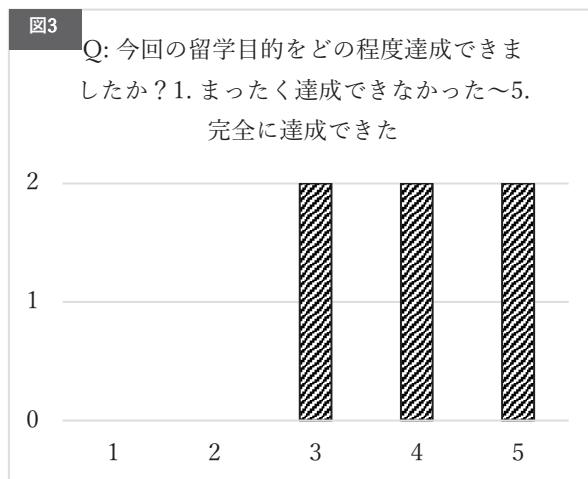
2.2. アンケート結果と帰国後報告

本学からの参加者6名に対し、本学の留学支援室が帰国後1か月をめどにアンケート調査を行った。回答はフォームズを用いて匿名で行われた。ここでは、アンケート項目の中から、留学目的の達成度やプログラムの満足度など、今回の留学経験の本質にかかわる重要なトピックを抜粋し、次にまとめる。

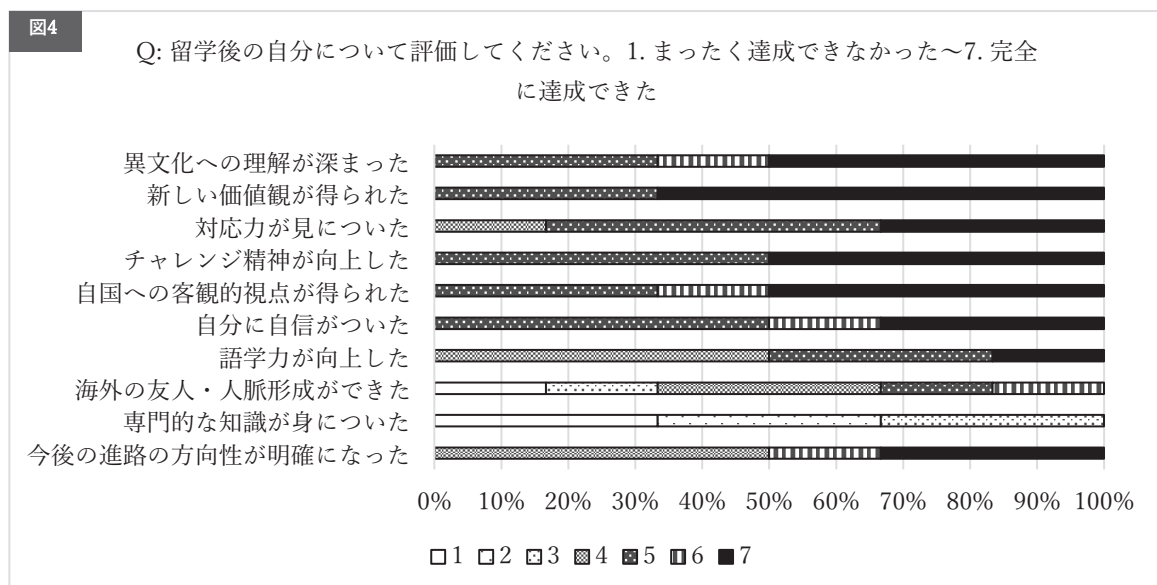
・留学目的の達成度

Q: 今回の留学目的を記載してください。

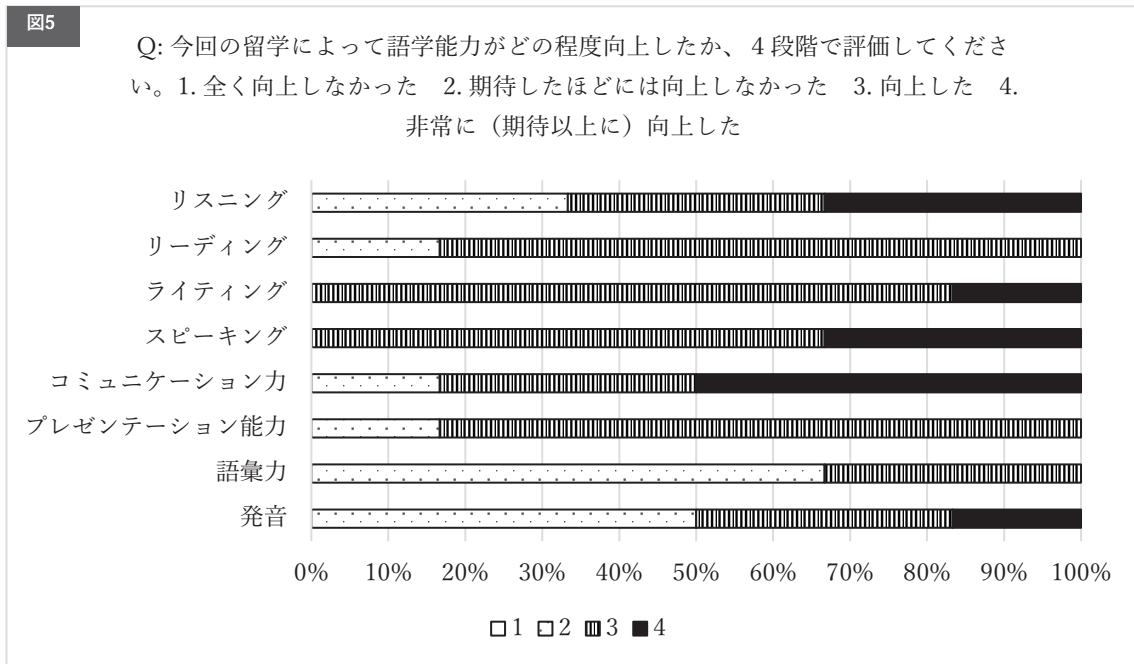
図2	回答
1	海外に行くという経験をしたことがなかったため、異国の雰囲気や文化などに触れてみたいと思ったため。また、海外での生活を通して、生の英語に触れ、英語を少しでも上達することができれば良いと思ったため。
2	英語力向上
3	語学学習
4	語学力向上
5	語学
6	語学能力向上



留学目的については、すべての学生が「英語力の向上」を挙げており、「どの程度達成できたか」という問いに対しては「1. まったく達成できなかった～5. 完全に達成できた」の5段階で評価してもらったところ平均値は4.00となった。また、「留学後の自分についての評価」という問いに対しては、「新しい価値観が得られた」「異文化への理解が深まった」「自国への客観的視点が得られた」「チャレンジ精神が向上した」などの項目が高い評価を得、反対に「専門的な知識が身についた」「海外の友人・人脈形成ができた」という項目の評価が低い結果となった。

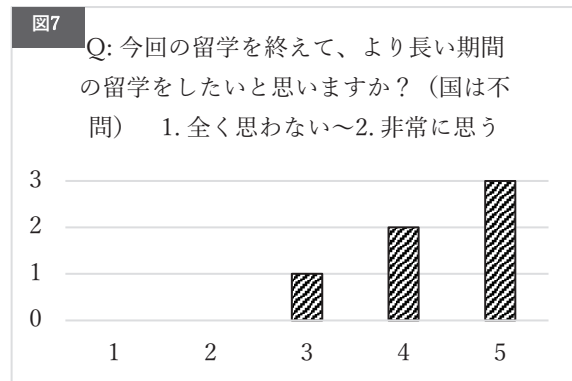
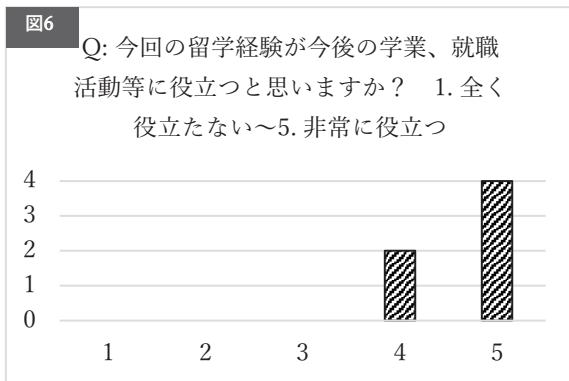


・語学能力の向上



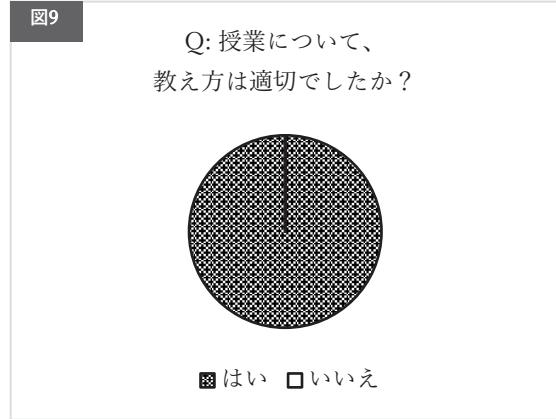
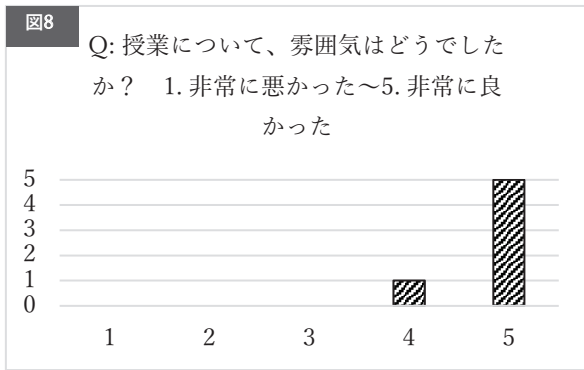
「今回の留学で語学能力がどの程度向上したか」という問いに対して、「1. まったく向上しなかった／2. 期待したほどには向上しなかった／3. 向上した／4. 非常に（期待以上に）向上した」の4段階で評価してもらったところ、スピーキングとライティング能力について向上を実感したという回答が多く得られた。反対に、語彙力や発音については、「期待したほどには向上しなかった」と答えた学生が多かった。

・今後の計画



「今回の留学経験が今後の学業・就職活動等に役立つと思うか」という問いに対して、「1. まったく役立つ 2. 役に立たない 3. 非常に役立つ」の5段階で評価してもらったところ、平均値は4.67となり、かなり高かった。また、「今回の留学を終えて、より長い期間の留学をしたいと思うか」という問いに対しては、「1. まったく思わない 2. 非常に思う」の5段階評価で平均値4.33と、こちらも高い数値を得た。

・授業の質



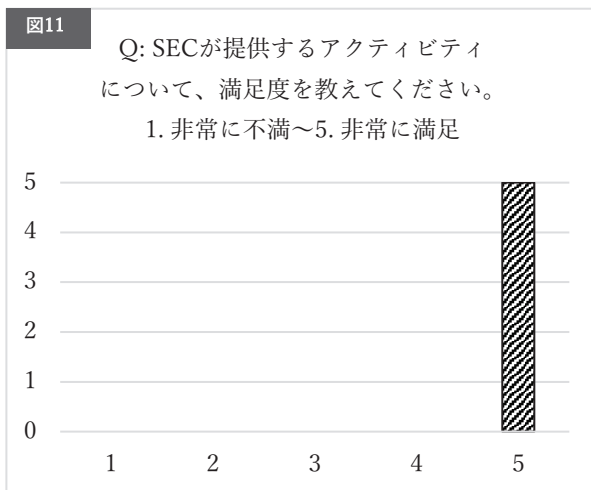
Q: 上記のとおり答えた理由を記載してください。

図10 回答

1	堅苦しい雰囲気ではなく、気楽に授業を受けることができたから
2	先生が親身になって教えてくれた
3	自分の語学力を高めることができたし、様々なスキルを学べたから。
4	学びたいことに合っていたから
5	他の人と英語でコミュニケーションすることを大事にしてくれたから
6	先生が生徒とのコミュニケーションを大切にされていて、内容のエッセンスを丁寧に説明してくれたから。

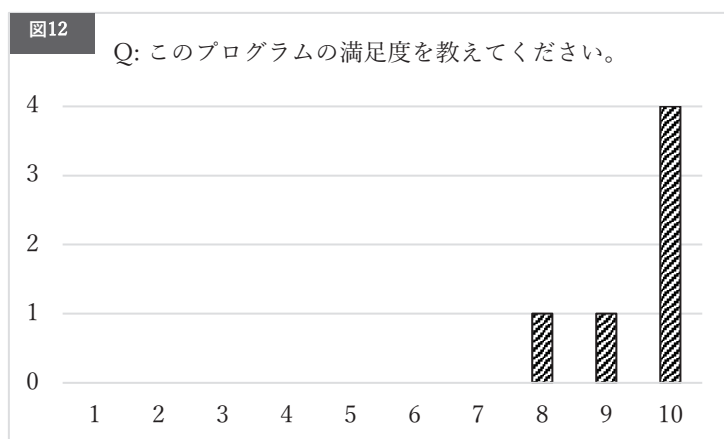
「授業の雰囲気はどうだったか」という問いに対して、「1. 非常に悪かった～5. 非常に良かった」までの5段階で評価してもらったところ、平均値4.83と非常に高い評価を得た。また「授業の教え方は適切だったか」という問いに対して、6名全員が「はい」と回答した。その理由を記述してもらったところ、「コミュニケーションがたくさんできたこと」「講師の教え方の雰囲気がよかったこと」などが挙げられた。

・アクティビティの質



「アクティビティの満足度はどうか」という問いに対して、「1. 非常に不満～5. 非常に満足」の5段階で評価してもらったところ、平均評価5.00となり、回答者全員が非常に満足していることがわかった。

・プログラムの満足度



「このプログラムの満足度はどうか」という問いに対して「1～10」の10段階で評価してもらったところ、平均値は9.50となり、かなり高い数値を得られた。

このように、アンケート全体を見ても本プログラムに対する評価がとても高いことがわかる。また、学内で留学報告会や反省会を行った際の参加者の発言から、カナダでのコミュニケーション重視の授業において自身の発言力の低さを実感したとか、英語力向上に向けてさらにモチベーションを高めることができたなど、参加者にとってプラスの経験であったことがうかがえる。

2.3. COVID-19関連

ここで、本プログラムがCOVID-19関連の制限にかなり影響を受けたことを記しておく必要がある。2022年8月の段階で日本政府は、帰国前72時間以内にPCR検査を受け陰性であるという証明を得ることを、日本再入国の条件にしていた。日本を出国しカナダに入国する際も日・加両方のアプリケーションでワクチン接種状況等を登録するなど各自万全の状態を臨んだが、この帰国前PCR検査の結果によって6名の参加者のうち3名が予定通りの日に帰国できないことになった。また、カナダ政府のルールにより、COVID-19陽性と判明した者はその後10日間飛行機に搭乗できないというものがあり、本来8月27日カナダ出国予定であったところ8月26日に陽性と判定された参加者3名は、9月4日までカナダ出国を遅らせることになった。そのため、この3名に加え引率者は滞在期間を延長し、5日間の自室隔離やその後のホテル待機など、予定にはない経験をした。陽性と判定された3名はこの期間、寮の自室での隔離やホテルへの移動、帰国便変更や複数回のPCR検査などで、多大なストレスを抱えたことと思われる。その際、惜しみなく援助をしてくれた現地スタッフの方々に心からの感謝を申し上げるとともに、日本でさまざまな調整をしてくださった本学留学支援系の皆様に篤く御礼を申し上げる。皆様のおかげで、予定よりは1週間ほど遅れたものの、9月5日に3名の参加者は無事帰国することができた。

このように、海外留学ではさまざまな予期せぬ事態が起こる。これに備えるには、各国の入出国にまつわる規則や法令などに精通しておくだけでなく、現地大使館との連絡や、現地スタッフと本学スタッフとの連携を日頃から密にしておくことなどが肝要であると痛感した。

3. 考察

上記のアンケート調査結果と、帰国後に学内で行われた報告会での発言等をふまえると、本プログラムへの満足度は基本的に高水準であったことがうかがえる。その要因は主に、イングリッシュ・ランゲージ・スクールが提供する授業の質の高さとアクティビティの充実にあるといえるだろう。平日のスケジュールとして、午前は授業、午後はアクティビティというふうにバランスよく時間配分されており、参加者たちの集中力や切り替えを、運営側がうまく把握しているように思われた。とはいえ、すべてが管理されているわけではなく、授業もアクティビティも講師あるいはスタッフの自由裁量にゆだねられる部分が多く、その場の雰囲気を読んで臨機応変かつ柔軟に対応しているさまが印象的であった。そのおかげで、参加者たちの意思が反映されることになり、主体的な行動が促されたと考えられる。実際、授業やアクティビティ以外の自由時間の過ごし方について、参加者たちが自ら講師や現地スタッフに情報を求めたり、感想を共有したりするな

どのコミュニケーションが頻繁に見られた。今年度は例年と異なりホームステイの選択肢があらかじめ排除されていたが、そのためにかえって参加者同士で自由に計画を立てて行動することができていたように思う。

ただ、このように参加者たちで過ごす時間では、他からの参加者もほとんど日本人であったため、授業時間以外では常に日本語を使用していた。本プログラムの実施時期が日本の大学の夏季休暇に合わせられているため、日本人参加者が多いのは仕方がないが、日本人同士の会話も英語で行うようにするなどの意識改革や、現地スタッフとのより積極的な関わりが実現できれば、さらによかっただろう。語学能力向上のためには、すべてがその言語で構成される中に埋没すること（読むもの・聞くもの・書くもの・話すものすべてが英語のみで行われるような状況）が効果的だが、今回のプログラムでは日本語を使う機会が意外に多かったようである。しかしその欠点も、さらなるステップアップとしての長期留学を目指す、ひとつの大きなきっかけとなった参加者もいるので、1年以上の留学を見据えた準備段階としての短期留学という点では意義のあるものだともいえる。

4. 今後の課題

上記の通り、今回の短期留学プログラムは大きな成果が得られたが、同時に今後の内容充実に向けての改善点も見受けられた。一点目は、耳で聞いてわかる語彙の拡充を図るために、よりいっそう「英語漬け」の経験にすることである。本プログラムの授業内では、参加者が自分から発言し意見を述べる機会がたくさん見受けられるが、学習者のその時点でのボキャブラリーを総動員してコミュニケーションをするだけでなく、新たな語彙の獲得に向けて地道な学習機会を提供することができればより良いプログラムになるだろう。アンケート調査では、「語彙力」や「専門的な知識」の獲得に不足を感じた参加者が多数いることが示されたが、限られた授業時間の中で今後どのように英語学習を続けていけばそれらの課題を達成できるのかを考えていくようにさせられればなお良いだろう。可能ならば、渡航前・渡航後のサポートや、プレイスメントテストの機会確保などの面で、我々送り出す側の大学での準備にも改善の余地があるかもしれない。

二点目は、このESLプログラムを基本としながらさらに発展的・専門的なプログラムを拡充することである。ESTのような理系分野に特化したプログラムのみならず、看護学分野や教育学分野にも手を広げることが考えられる。実際、2022年度春季（2月末～3月末）には、English for Nursing（看護学のための英語）コースも紹介されている。今後、アルバータ大学との関係をより緊密なものとしながら、岐阜大学の特色ある諸学部との連携を強固にしていけると良いだろう。

また、COVID-19関連の制度的な変動や混乱が今後しばらく海外留学の機会に影響を与えると考えられる。参加者の安全な渡航・現地生活をサポートするために、教職員の側で引率や定期連絡などできるだけのことをする必要があるだろう。参加者の主体的な学習を妨げることなく、基本的な安全を保障するために、組織としてまた引率責任者として、最適な支援方法を継続的に模索していくべきである。

5. まとめ

本論文では、アルバータ大学イングリッシュ・ランゲージ・スクールへの短期留学についての視察報告を行った。オリジナル教材によって組み立てられた質の高い授業と、参加者の自発的な行動を促すアクティビティの運営によって、参加者の全体的な満足度はかなり高い水準にあることがわかった。さらに、短期留学実施後のアンケート調査に対する回答の分析を通じて、本プログラムの特色を示し、今後の課題について検討した。また、今回の短期留学がCOVID-19影響下での試みであったことにもふれ、最適なサポート方法についても考察した。

謝辞

本留学プログラムに関係していただいたすべての方々に心より感謝を申し上げる。特に本学留学推進係留学支援室の皆様、留学推進部門（短期派遣プログラム委員会）の先生方、アルバータ大学イングリッシュ・ランゲージ・スクールの運営スタッフのLisa Matthew氏とMark Bell氏、ならびに講師の方々に深くお礼を申し上げます。

また、本プログラムへの視察報告は（公財）田口福寿会による国際学術交流助成の支援を受けている。

参考文献

岐阜大学グローバル推進機構HP. www.glocal.gifu-u.ac.jp

岐阜大学グローバル推進機構. 『岐阜大学国際交流年報2021（第7号）』2022年6月.